

## 「言葉の院外処方箋」

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

### 第 95 回

『「勇ましく前進」～ 自分の懐中電灯で足元を照らす ～』

2022年2月4日TBSテレビ局を訪問した。『TBSテレビ報道局 特別解説委員 兼 シニアエキスパート 兼 JNN「報道特集」担当』の小嶋修一氏のご配慮で、局内を見学した。皆様の真摯な姿には、感動しました。大変有意義な貴重な時となった。小嶋修一氏との出会いは、10年以上前であろうか。「がん哲学・外来」番組でお世話になり、また、「がんプロ会議」委員としても繋がった。2022年2月5日は、がんサポートナース 代表:片岡幸子氏 主催の養成講座で、講演【『勇ましく前進』～ コミュニケーション力 ～】を依頼された。

癌病理学者の吉田富三(1903-1973)は「人間はロビンソン・クルーソーのように孤島に1人住んでいたのでは、良い人か悪い人かは判らない。人間社会の中に住まわせてみて、初めてその性が明らかになる」と言っている。がん細胞は1個では診断できない。顔かたちが悪くても、心の優しい人がいる。紳士面して悪い人が多い。表面では診断できない。「学生諸君も似たところもある。一人ひとり話すと、常識もあり、善良な青年に見えるのだが、学生自治会として集団行動になると変なことを言ったりする。」と、学生紛争華やかな時代に、吉田富三は東大の学生に言った。以前の新聞記事によれば、日本と米国と中国と韓国の青少年にアンケート調査の結果、「偉くなりたいか」は日本人が一番少ない。「大きな組織などで自分の力を発揮したいか」も、最も少ない。「多少退屈でも平凡な生活」が最も多い。「自分の会社や店を作りたいか」最も少ないとのことである。30年後日本国はどうか？教育は本当に大切である。これは20歳くらいのときからきちっと始めないと、あとで取り返しがつかなくなってくる。緩慢な変化には気づかない。癌化と同様である。

競争的環境の中で、みんな個性に輝きたいであろう。どうしたら、個性に輝くか。自分の懐中電灯を持たないと。人の懐中電灯を借りてもしょうがない。北極星みたいなものばかり求めるのではなく、自分の懐中電灯で足元を照らすことが肝要。『無くてならないものは多くない』、そして『無くてよいものに縛られるな』である。尺取り虫は、「自分のオリジナルポイントを固めてから、

後ろの吸盤を前に動かし、そこで前に進む」。自分のオリジナルポイントを固めてから前に進む。「がん哲学」はこういう人物になれということでもある。約1年前の記事が、話題のようである。解決できなくても解消はできる #コロナを生きる言葉集

(画像)。まさに「長引くコロナ禍を焦らず慌てず パニックにならず生きるヒントを 教えていただきます。」の実践であろうか！

2020/4/24

「不安から逃げずに」 コロナ疲れのあなたに、言葉の薬 | 朝日新聞デジタル

朝日新聞  
DIGITAL

## 「不安から逃げずに」 コロナ疲れのあなたに、言葉の薬

有料会員限定記事

聞き手・岡崎明子 2020年4月24日 10時20分

新型コロナウイルスの感染拡大で外出自粛が求められる中、自宅で過ごす人が増えています。日常生活が突然奪われ、明日をも見通せない今、心が不安定になっていませんか。がん哲学外来を立ち上げ、多くのがん患者や家族らと対話してきた順天堂大名誉教授の樋野興夫さんは、この状況はがん患者が置かれた状況に似ていると言います。コロナ疲れしている私たちに、「言葉の処方箋（せん）」を出してもらいました。



順天堂大名誉教授の樋野興夫さん=藤原伸雄撮影

1954年生まれ。がん哲学外来創始者、順天堂大学名誉教授、新渡戸稲造記念センター長。著書に「日めくり 人生を変える言葉の処方箋」など。

### 家族で過ごすのが苦痛

——がん哲学外来での経験が、今回のコロナ禍と重なる部分がありますか？